

マルクーゼを超えて：
ジェントリフィケーション、立ち退き、アンホーム
ングの暴力性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科 公開日: 2020-05-11 キーワード (Ja): 立ち退き, ジェントリフィケーション, 住宅事業, 社会的排除, 都市地理学 キーワード (En): 作成者: Elliott-cooper, Adam, Hubbard, Phil, Lees, Loretta, 松尾, 卓磨 メールアドレス: 所属: King's College London, King's College London, the University of Leicester, 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2003164

Title	マルクーゼを超えて：ジェントリフィケーション、立ち退き、アンホーミングの暴力性
Author	エリオットクーパー, アダム / ハバード, フィル / リーズ, ロレッタ / 松尾, 卓磨[訳]
Citation	空間・社会・地理思想. 23 巻, p.229-245.
Issue Date	2020-03-13
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科
Description	Progress in Human Geography, 2019, pp.1-18.
DOI	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

マルクーゼを超えて

——ジェントリフィケーション、立ち退き、アンホームिंगの暴力性——

アダム・エリオットクーパー*、フィル・ハバード**、ロレッタ・リーズ***
(松尾 卓磨**** 訳)

Adam ELLIOTT-COOPER, Phil HUBBARD, Loretta LEES

Moving beyond Marcuse: Gentrification, Displacement and the Violence of Un-homing

Progress in Human Geography, 2019, pp. 1-18

原論文は the Creative Commons Attribution 4.0 International (CC BY 4.0) License(<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>) の条項の下でオープンアクセスで提供されている論文である。

DOI: 10.1177/0309132519830511, First published online: February 24, 2019, The original publisher: SAGE Publishing, Link to the original article: <https://journals.sagepub.com/doi/full/10.1177/0309132519830511>

要旨: 立ち退きという用語は様々なスケールで生じている略奪や強制退去の過程を説明するために用いられており、現代地理学においては最も主要な研究テーマの1つとなっている。立ち退きは中でもジェントリフィケーションの影響に関する研究において論じられることが多く、本稿ではその点を踏まえて立ち退きをアンホームिंगの過程としてより的確に定義し概念化することを試みる。その際、様々なスケールやスピードで進行する立ち退き、追放、排除の過程がジェントリフィケーションによって加速されるということに加えて、ジェントリフィケーションによって人と場所の繋がりが例外なく引き裂かれているということにも言及する。そしてそうした視点を抛りどころとして——なおかつ立ち退きを暴力の一形態として考え——立ち退きが生み出す感情、社会心理、身体への否定的影響を十分に把握した上で、結論として、そうした影響に対して抵抗していくためにも立ち退きが生じる多様なスケールや時代性をより正確に捉えなければならないということ述べる。

キーワード: 立ち退き、ジェントリフィケーション、住宅事業、社会的排除、都市地理学

I章 導入

立ち退き displacement という用語は、多種多様な文脈や空間的スケールで生じ様々な形態をとる強制的移動を説明するために使用され、人文地理学においては今や最も頻繁に使用される概念の1つとなっている (Brickell et al., 2017)。この用語の適用範囲は広く、自然災害、戦争、国家的テロの影響を説明する際に頻繁に使用されているが (例えば Graif, 2016; Lunstrum, 2016; Oslender, 2016)、(入植者) 植民地主義の特徴である「土地収奪」、収用、暴力的排除などの過程にとっても不可欠な要素として考えられている (Bonds and Inwood, 2016)。しかしこの用語が最も頻繁に用いられているのは、都市ネオリベリズムの一環として略奪を介して実施される「都市内での新たな土地の囲い込み」や資本の蓄積様式を説明する文脈である (Hodkinson, 2012)。そしてその点について説明する研究では、人種主義的資本主義 racialised capitalism 体制下における都市内での立ち退きと植民地入植者によって「所有権制度全体を別

のものに置き換えるために遂行される」土地収奪とのあいだに重要な共通点があることが指摘されている (Wolfe, 2016: 34。加えて Smith, 2002; Fullilove, 2004; Jackson, 2017 も参照せよ)。

こうした共通点は立ち退きが現代都市地理学の研究テーマとして重要であることを示しており、さらに社会的正義や空間的正義といった重要な概念の議論にも関連していると言える。そうした中で Delaney (2004: 848) は次のように述べている。

立ち退きというのは使い勝手の良い概念であり、性格の異なる様々な出来事や経験の共通要素を強調し一般化する概念である。ハイパーモビリティ hypermobility が自由の象徴として広く礼賛される時代にあって、立ち退きという概念は人びとの意思や願望に反する強制されたモビリティに焦点をあてる概念である。また立ち退きの対象となる人びとがその対極にいる外部勢力によって管理や操作の対象とみなされていることを考えると、立ち退きを脱主観化 de-subjectification の一形態として考えることも可能である。

* Research Associate in the Department of Geography, King's College London, UK.

** Professor of Urban Studies, King's College London, UK.

*** Professor of Human Geography at the University of Leicester, UK.

**** 大阪市立大学文学研究科・院生

しかしながら、その汎用性の高さや幅広い文脈で使用されている状況を踏まえると、立ち退きは古典的な「混沌とした」概念、すなわち、何かを明らかにすればするほどその明らかにした内容が不明瞭となるようなある種のリスクを抱えた概念であると考えられることもできる。

その点は都市のジェントリフィケーションに関する研究を確認すると明らかである。つまり、そうした研究においてジェントリフィケーション研究者らは頻繁に立ち退きに言及しているが、彼ら彼女らは立ち退きという概念と、重複部分を有し時に同義ともみなされる様々な関連概念とを同列に扱っている。例えば計画的かつ意図的な住居の破壊を示す「domicide」(Porteous and Smith, 2001) という概念があるが、ジェントリフィケーションによる立ち退きは必ずしも計画的もしくは意図的に引き起こされるわけではないため、ジェントリフィケーションによって引き起こされるありとあらゆる立ち退きに対してこの「domicide」という用語を適用することは困難である。またPorteous (1988) は上記の研究の関連研究において「topocide」に言及しており、この「topocide」はある場所に関する記憶memoryが消し去られた際に発生するもので、立ち退きの現象学的側面を想起させてくれる用語である。しかしながら、この用語は個々の世帯での立ち退きを必ずしも言い表すものとはなっていない。同様に(都市再編に付随して生じる)地域の破壊やその影響を受けて経験される心的外傷性のストレス反応に関係する用語として「root-shock」(Fullilove, 2004)を挙げることができる——Pain (2019) は場所に「刻み込まれる」都市のトラウマurban traumaについて詳述しているが、その際に説明された住宅の略奪に見受けられる「緩やかな暴力」と上記の「root-shock」は類似している。

これらのすべての用語が何らかの略奪の形態を含んでおり、明確な否定的ニュアンスが含まれている。しかしわれわれは都市のジェントリフィケーションという文脈において多様なかたちで生じる立ち退きを捉える上では、先に示したいいくつかの用語では正確性や包括性を欠き不十分であると考えている。なおわれわれは都市で生じるあらゆる立ち退きがジェントリフィケーションの過程と関連しているわけではないということ(Smart and Smart, 2017)も理解しており、加えてジェントリフィケーションがあらゆる立ち退きの原因ではないという指摘の存在(Freeman, 2005)についても承知している。とは言え、今や都市のジェントリフィケーションに関する研究においては立ち退きという概念の使用が定石となっ

ており、ジェントリフィケーションと立ち退きの関連性にはもはや疑いを挟む余地はない。つまり、ジェントリフィケーションと立ち退きの関係を精査することは依然として最重要事項なのである。しかしながら、そうであるにもかかわらず、ジェントリフィケーション研究においては立ち退きに関する理論的・具体的検討が不十分なままとなっている(Baeten et al., 2017)。

そこでわれわれは本稿を通じて以下の点について主張したい。まず、現代都市のジェントリフィケーションの文脈においては多種多様なかたちで立ち退きが生じる可能性があることを想定しなければならない。その上でわれわれは、そうした多種多様な立ち退きを十分に包括する概念として立ち退きを厳密に概念化し、その厳密に概念化された立ち退き概念を用いて研究を進めなければならない。かつてMarcuse (1986) は立ち退きを、ある地域がそこで暮らす貧困層にとって非常に高価な地域となった際に生じる事態として概念化した。そして今やこのMarcuseによる立ち退きの概念化は1つの古典となっている。しかし、今後のジェントリフィケーション研究ではより厳密に概念化された立ち退き概念を用いて古典的なMarcuseによる概念化を乗り越えていかねばならない。確かに放棄、立ち退き、ジェントリフィケーションの相互関係を踏まえたMarcuseの概念化は、ジェントリフィケーションによって引き起こされる立ち退きに関する研究において里程標とされてきた。しかしながら、このMarcuseの概念化においては21世紀以降の立ち退きについて、とりわけグローバルノース以外の国や地域で発生している政府主導のジェントリフィケーションstate-led gentrificationによる立ち退きについて必ずしも言及されているわけではない。またMarcuseは地価を強調しているが、そうした考え方は立ち退きの現象学的側面や情動的側面、ひいては立ち退きという経験に内在する怒りや絶望といったものを理解する上では有効とは言えない。つまるところMarcuseによる概念化——1980年代のニューヨークで得られた知見に基づいている——はその当時の産物に過ぎないのである(Slater, 2009を参照せよ)。

他方、Atkinson (2015: 376) は立ち退きを、居住者と帰属しているコミュニティとの繋がりを断ち切るアンホーミングun-homingの過程として概念化しており、そうしたアンホーミングの過程を経験、経済状況、社会状況、家庭状況、生活環境といった様々な要素や状況が合わさって生じるものとして捉えている。そこで本稿のレビューにおいてはこの

Atkinsonによる立ち退きの概念化を参照することとし、その発展を目指していく。またそこには立ち退きを情動的、感情的、物質的な断絶ruptureとして捉えるべきと主張するBrickell et al (2017) の論考も加えることとする。その上で本稿は以下の構成に基づき議論を進めていく。まず次章においては立ち退きをジェントリフィケーションの定義の特徴a defining featureとして定位しつつ、ジェントリフィケーションと立ち退きの関係性について検討する。また次々章では居住権right to dwellを蝕みながら人と場所の繋がりを暴力的に断ち切ってゆくアンホーミングの一形態として立ち退きを捉え、立ち退きの発生によって生じる悪影響に言及しながら、なぜ立ち退きが問題であるのかということについて考える。そしてその次の章では、立ち退きを把握する手法——並びに立ち退きをもたらす影響を把握する手法——は立ち退きが発生するタイミングや空間によって変化する可能性があるということを指摘し、立ち退きがある問題性と立ち退きの進行速度の関係性に関する検討へと議論を広げていく。

II章 ジェントリフィケーションの文脈における立ち退き

Glass (1964) によって初めてジェントリフィケーションという用語が作り出された時から、立ち退きはほとんどの場合においてジェントリフィケーションの定義の一構成要素として位置づけられてきた。そして彼女が記したように「全体的に見ても相当数の立ち退きが発生しており…真っ先に困難に耐えられなくなる人びと——零細企業、社会的地位が低い人びと、はみ出し者——がみな追い出されている」(Glass, 1964: xxv-xxvi)。もちろん地域スケールで生じる立ち退きへの注目の歴史は長く、Glassの報告よりも約1世紀も前にFriedrich Engelsの住宅問題The Housing Questionにおいて、住宅投機によって特に労働者階級住民に否定的影響が及んでいることが指摘されていた。

労働者らが暮らす住居や一般的な小規模住居は希少かつ高価となり、そのほとんどが入手困難となっている。そうした状況下で建設業においては労働者のための住宅建設が除外されつつある。なぜなら建設業においては高価な住居を建設し、より多くの利益をあげられる投機の方が求められているためである。その結果として労働者らは町の中心

地域から町外れへと追いやられているforced out。
(Engels, 1975 [1872]: 18)

この見方では富裕層による低所得者層の立ち退きと資本投資の循環とが関連づけられており、立ち退きが不均等発展における避けたい帰結として捉えられている。こうした資本投資は経済の好不況の中で満ち引きを繰り返すものであるが、いずれの場合でも資本投資の過程を加速させるような略奪による蓄積を伴いながら立ち退きと投資の規模の拡大が続いている (Harvey, 2004; Glassman, 2006; Zhang and He, 2018)。また直近の10年間においては特に貧困の郊外化によってジェントリフィケーションによる立ち退きの程度や規模の拡大が顕著となっている。この貧困の郊外化というのは低所得者層が地価の上昇によって都市中心部で暮らせなくなり追いやられることで発生するもので、多くの都市において報告されている (Hochstenbach and Musterd, 2018)。なお、ジェントリフィケーションが社会的に不当な過程で、なおかつ本質的にネガティブな過程として捉えられるようになったのはこうした立ち退きの存在のためであった。しかしそうした中で現代の都市再編の渦中にいるエリートらは、ジェントリフィケーションという用語が持つネガティブなニュアンスに配慮してこの用語の使用を避け、代わりに都市再生、都市復興、都市再建、都市再開発といったよりポジティブな用語を用いることによってジェントリフィケーションの存在を目立たないようにしている。

他方、ジェントリフィケーション研究に関して言うと、低所得者層に対するジェントリフィケーションの影響ではなく、ミドルクラスのジェントリファイアーであったり、ジェントリファイされた生活空間の生産に焦点があてられてきたことが指摘されている。(Slater et al., 2004; Paton, 2014; Huse, 2014)。Helbrecht (2017: 2) はそうした傾向を持つジェントリフィケーション研究を「極度の知的偏向を抱えて動きまわる1つ目のサイクロプス」と喩えた。というのも、そうしたジェントリフィケーション研究においては「立ち退きが無視されると同時に、ジェントリフィケーションの過程の中でもアップグレードという側面ばかりが研究されているため」である。ジェントリフィケーションによって引き起こされる立ち退きの多様な形態や様相に関する詳細な検討が求められてはいたものの、それは一つの意見に過ぎず、立ち退きはジェントリフィケーションの「影の側面」(Baeten et al., 2017: 645) として後景へと追いやられていたのがあった。

とは言え、立ち退きはジェントリフィケーションよりもはるかに把握が難しい現象である。この点に関してはBernt and Holm (2009) が主張しているように、ある特定の文脈において立ち退きが生じているのかを判断することは、立ち退きに対してどのようにアプローチしているのかということに大きく左右される。Zuk et al. (2018: 35) もその点に同意し、「分析対象となる現象の定義や測定に際して、その定義や測定を促してくれる優れた手法」が強く求められているということを指摘している。そうしたニーズが生まれる理由の1つとしては、都市というスケールにおいてその内部で発生している強制的移動と自発的移動との区別に困難が伴っていることが考えられる。長い時間をかけて確立され、安定した暮らしが確保されていたコミュニティの場合であっても、日常生活を送っていく中では居住人口の循環が生じるものである。また不動産物件も繰り返し——大抵は似通った社会経済的ステータスの人びとへ——売却されるか、もしくは前住者が退去した際と同様の価格帯で新たな所有者へと賃貸されるものである。こうした循環の中には強制的に行われること——例えば住宅ローンの継続的支払いの不履行による住宅の差し押さえやテナント料の滞納による物件からの退去——も含まれるのかもしれないが、それは立ち退きというよりは本質的には入れ替わりreplacementとして考えられる。ただし個別に進められる立ち退きであっても、それによって様々な社会的・文化的気質を持つ人びとが特定の地域へ移動させられている場合にはそうした個別の立ち退きが寄り集まることによってジェントリフィケーションの発生への道筋が徐々に踏み固められていると考えることもできる(Chum, 2015)。しかし、家賃の支払いが困難であるために住民が立ち退かされることと、家賃の支払いが困難な住民と支払いが可能な住民が入れ替わることとは経済力の差の点から考えても異なる事態であり、後者のような入れ替わりは強制的なenforced立ち退きの典型的事例、例えば物件価値の高騰を見越して複数の家主や組織によって住宅物件が一括して買い上げられるようなケースとは大きく異なっている。

なお上記の強制的な立ち退きにあたる「大量排除によるジェントリフィケーション」は、グローバルサウスにおいては都市貧困層の生活に重大な影響を及ぼす過程として考えられており(Desmond, 2012:90)、とりわけインフラ整備のために政府やNGOによって投資が行われてきたファヴェーラやスラムの貧困層が大きな影響を受けている

(Cummings, 2015)。また「メガディスプレイメント mega displacement」と名付けられた事象がグローバルノースでは前例のない規模で多くの経済成長国——インド、インドネシア、マレーシアを含む——において発生している(Lees et al., 2016を参照せよ)。そうした国々の中でも交通インフラが依然として不完全であったり重要なサービスが都市の外にまで行き届いていない地域では再定住の権利が不安定である場合が多く、立ち退きはそうした状況下で暮らす人びとに対して破滅的な影響を与える可能性がある。中にはそのようなケースでの立ち退きがジェントリフィケーションそのものとして捉えられている状況を疑問視する見方もあるが(Ghertner, 2014)、新しい比較研究においてはそうしたグローバルサウスにおける「クリアランス」とグローバルノースにおける「都市再建」事業のあいだに重要な共通点があることが明らかにされている(Ascensão, 2015; Lees et al., 2016; Shin and Lopez-Morales, 2018)。

ただし、ジェントリフィケーションは文化的収奪や象徴的暴力といったより捉えがたい過程を含む可能性があり、そうした中で生じる立ち退きの過程というのは常に大規模な排除のようなあからさまなかたちで現出するわけではない(Hern, 2016; Janoschka and Sequera, 2016)。このことはMarcuse(1986)によっても強調されている。彼はジェントリフィケーションには排除を介した低所得世帯の直接的移動だけではなく、労働者階級の文化やアイデンティティが全体的に衰退することによって既存の住民が変わりゆく地域において落ちていて生活することができなくなるような間接的な立ち退き indirect displacementも含まれると主張した。そして彼はそのような主張を通じてジェントリフィケーションと立ち退きの関係性を明らかにしたのであった。その中で彼は次のように述べている。

ある家族が自らを取り巻く地域の劇的な変化を目の当たりにした時、その家族が親しくしていた友人らが地域を去っていった時、その家族が最員にしていた店舗が閉店に追い込まれ、他の顧客を相手にする新しい店舗がそうした店舗と入れ替わったとき、そして公共施設、交通システム、支援サービスにおける変化によって明らかにその地域の活力が失われ始めた時、立ち退きの圧力は大きくなっている。(Marcuse, 1986: 207)

周知のとおりMarcuse(1986)は立ち退きの過程において相互に関連する5つの過程を見出してお

り、彼は経済的過程、社会的過程、文化的過程を組み合わせながら、さらに最後の居住者の立ち退きlast resident displacementと連鎖的な立ち退きchain displacementの区別についても言及している。前者は物件の最後の占有者との関係で捉えられるべき立ち退きを表し、後者は住民の立ち退きは漸進的な長期的移行という文脈で生じるという考え方に通じている。コミュニティの崩壊やアンホーミングは異なるスピードで生じる可能性がある、そのことを示しているという意味でもこの指摘は非常に重要である(III章を参照せよ)。

しかしながら、個人が被るアンホーミングをどの時点においてコミュニティ全体の消滅を含む包括的な立ち退きの形態として捉えることができるのかという点については依然として判然としていない状況である(Nowicki, 2014)。そしてそうした状況というのは地域の社会的・経済的性格の変化をどの時点においてジェントリフィケーションの発生として捉えることができるのかという論点と関係しており、その点については絶え間なく議論が続けられている。というのも、地域の大きな社会経済的変容は相当数の立ち退きが発生しなくても起きる可能性があるという仮説が少なからず認められているためである。その例として現住者自身によるアップグレード——平均的な所得水準の家庭が住居の状態を自ら改善すること——が立ち退きを引き起こすことはない」と主張する研究も数多く見受けられる(Johnson, 1983; Van Criekingen and Decroly, 2003を参照せよ)。また別の例としてOwen (2012) による1970年から2009年にかけてのアメリカ合衆国の大都市の変容に関する研究では、世帯収入、学歴、職種、家賃、不動産価値といった指標を用いて地域の上方的変容が地図化されており、多くの地域において際立った人口変動を伴わない変化、すなわち、立ち退きを伴わないかたちで上方的変容が発生していることが報告されている。また同様の例としてHamnett (2003: 2406) は「専門職層と管理職層に見られる大規模かつ一貫した割合の増加と熟練・準熟練・非熟練の単純労働者層に見られる大規模かつ一貫した割合の減少」を根拠としてLyons (1996) と Atkinson (2000) が提示したロンドンのインナーシティにおけるジェントリフィケーションに関する主張に反論した。最終的にハムネットは「ロンドンの職業階層構造において進行してきた変化というのは大規模な直接的立ち退きと関連づけられてきたわけではなく、ある階層が別の階層へと段階的に入れ替わっていく過程との関連で考えられてきた」と主張し、ロンドンにおける立ち退き

に関する意見に反論を示したのであった(Hamnett, 2003: 2424)。

しかし、この「入れ替わり」に関する主張はSlater (2006: 748) によって批判されており、彼は「立ち退きの発生を示す数値が存在していないことを理由に[Hamnett]は労働者階級を等閑視しているようだ」(補足は原著者らによる)と述べている(Davidson and Wylie, 2012も参照せよ)。またFreeman (2005) は、地域が上方的に変容していたとしても貧困状態にある(黒人系の)居住者はその地域内のそれまで暮らしてきた場所に留まり裕福な居住者の様々な活動から恩恵を受けていると指摘しているが、彼のこの指摘は頻繁に引用されているものの事例証拠が根拠とされているという理由から退けられている(補足は原著者らによる)(Curran, 2007; Sullivan, 2007; McKinnish et al., 2009を参照せよ)。さらに、貧困状態にある居住者は身近なところで発生しているジェントリフィケーションから恩恵を受けられることを理解しており、それゆえにそれまで暮らしてきた場所に留まっているのだというFreemanの考え方に対してはSlaterも反論をしている。Slater (2006: 749) は、仮にそうした貧困状態にある居住者がそれまで暮らしてきた場所に留まっているとするならば、それは「厳しく制約の多い住宅市場においては彼ら彼女らにできることが他にないためである」と反論している。つまりSlaterは、数人の労働者階級の住民がその場所に留まっていたとしても、それは彼ら彼女らが「立ち退きの圧力displacement pressure」(Marcuse, 1986)を経験していないことにはならないと主張している。Shaw (2008: 1702) はここまで確認してきた議論を整理して「立ち退きが全く発生していない」ということを本気で示そうとしている研究は存在していない」と述べている。

またこのような議論は「マージナルジェントリフィケーションmarginal gentrification」(Rose, 1996; Van Criekingen and Decroly, 2003; Shaw, 2008)の文脈にも関係している。この「マージナルジェントリフィケーション」とは「高等教育を受けながらも経済的には困窮している前衛的アーティスト、大学院生、ボヘミアンとカウンターカルチャーを掛け合わせたタイプの人」(Rose, 1996: 132)の流入を内容とする過程であり、彼ら彼女らは自分たちで住居を改修したり、より広い範囲で地域をつくり変えている。例えばVan Criekingen and Decroly (2003)のブリュッセルに関する研究においては、マージナルジェントリフィケーションには文化的ステータスや地域の評判の変化、住宅ストックの改修、社会的変化などは含

まれるものの、特別に裕福な地域の出現はそこには含まれないということが指摘されている。そして多くの論者によってそのようなマージナルジェントリフィケーションは概して立ち退きとは関連がないものとして捉えられた (Van Weesep, 1994; Billingham, 2017)。しかしながら、そうした過程の進行が見られる地域が富裕層やディベロッパ、投資家によって「発見された」場合にはやがて相当な規模の立ち退きの圧力が生じる可能性がある (Marcuse, 1986)。換言すると、そうしたジェントリフィケーションの古典的な「第一波」はそれ以降に押し寄せるジェントリフィケーションの波のきっかけになり得るということを理解しておかねばならない。なお、この古典的な「第一波」にあたるジェントリフィケーションに関しては膨大な事例が見受けられるが、とりわけアーティストによるジェントリフィケーション *artist-led gentrification* の文脈において多く確認することができる。なお、このアーティストによるジェントリフィケーションというのは、アーティストやクリエイティブ産業に従事する労働者が「世の中のリアルに触れることができる」インナーシティエリアに活動拠点を置くことで進行する過程である。彼ら彼女らは家賃が安く使い勝手の良い作業空間の確保が可能であるという理由でそうした地域に活動拠点を置き、それによってその地域で魅力的な特徴が生み出されるのだが、そうした魅力的な特徴を生み出していたアーティストら自身がやがてその地域から「立ち退かされる」のである (Ley, 2003; Pratt, 2009a)。そして多くの場合この過程は小売業のジェントリフィケーション *retail gentrification* に関連する過程として考えることができる (Zukin et al, 2009; Hubbard, 2017)。

また立ち退きとマージナルジェントリフィケーションの関係性に関する議論が、経済的資産は低水準でありながら社会資本の点では高い水準となっている人びとをマージナルジェントリファイアーや新参のジェントリファイアーとして位置づけるべきなのか——ひいてはそもそも彼ら彼女らをジェントリファイアーとして捉えるべきであるのかなど、一筋縄ではいかない複数の論点を孕んでいることは明らかである (Smith, 2004; Watt, 2005)。ジェントリファイアーの例としてはいわゆる「社会的保守主義者」——居住地を頻繁に変える高学歴な都市居住者——を挙げることができる。そうした人びとは自ら「真正なる」社会空間とみなしている空間を維持しようとする傾向にあるが (Brown Saracino, 2004)、そうした空間が成立しているのは——階級、エスニ

ティ、年齢、文化をもとにその輪郭が決定されている——確立されたコミュニティが存在しているためであり、文化的な本質化を伴っている可能性がある。そのため実際には排他的な立ち退き *exclusionary displacement* に該当する立ち退きが引き起こされている。そしてこの傾向はスチューデントフィケーション *studentification* の文脈においても顕著に表れている。というのも、このスチューデントフィケーションの過程には「核家族」向けに設計された住宅を学期中に学生らが滞在する住宅へと転換するコンバージョンが含まれており、通常このコンバージョンは賃貸目的での物件購入の後に実施されるためである (Smith, 2004)。そしてこの過程を相対的に見た場合——学生は知的技能や文化的資本の点で豊かになる傾向にあるが経済的に豊かになっているわけではないため——地域がより裕福になっているとは言えない。しかし多くの場合において、長年暮らしている住民向けの学校や店舗、パブなどのサービスがスチューデントフィケーションの過程によって消失しているため、そこに地域の高級化につながる排他的な立ち退きをはっきりと確認することができる (Allinson, 2006)。

またジェントリフィケーションと立ち退きの関連性に関して研究者のあいだで合意形成が不十分であるということは、とりわけ新築のジェントリフィケーション *new-build gentrification* の文脈において際立っている (Smith, 2002; Davidson and Lees, 2005, 2010; Boddy, 2007; Davidson, 2009を参照せよ)。この新築のジェントリフィケーションというのはジェントリフィケーションの一形態ではあるが、理論上立ち退きを伴わないものである。これは Henig (1980: 648) が自身のアメリカでの研究に基づいて導き出した結論であり、彼は「専門職層の人びとが新築物件もしくは空き物件に小規模で流入している」ならば、ジェントリフィケーションは必ずしも立ち退きを引き起こしているわけではないと述べた。しかしながら Davidson and Lees (2005: 1170) は、脱工業化の最中にある既成市街地の土地においても新築のジェントリフィケーションによって確実に立ち退きが引き起こされていると考え、彼らはそうした新築のジェントリフィケーションによる立ち退きは「間接的」な立ち退きである可能性が高いということを指摘している。つまりそれは「排他的な立ち退き」という形態の立ち退きであり、この形態の立ち退きによって低所得者層はジェントリフィケーションの影響下にある地域の物件にアクセスすることが困難となっている。そのためこの新築のジェントリフィケーション

は「上方の変容の最中にある」地域において労働者階級の住民の居住を一層困難にする過程であると考えることができる (Visser and Kotze, 2008; Kern, 2009; Rerat et al., 2010; He, 2010; Rose, 2010; Doucet et al., 2011; Shaw and Hagemans, 2015)。こうした点はジェントリフィケーションによって引き起こされる立ち退きが住民の転入と同時に生じる単なる転出ではなく、多種多様なアンホーミングの過程を内包しているということを示唆しており、このアンホーミングの過程へ着目することによって社会的正義・空間的正義に関する重要な論点も浮かび上がってくる。

III章 アンホーミング、立ち退きの暴力性

上記の研究例は、ジェントリフィケーションの定義の核となっているのは土地そのものの再価値化ではなく立ち退きであるということを示している。人びとはコミュニティを自分たち自身のものであると考えるものであるが、ジェントリフィケーションはそうしたコミュニティとそこに属する人びとの繋がりを断ち切る *severs* 過程である。そのためそうしたジェントリフィケーションの過程が進行する状況においては一定程度の立ち退きは不可避であると主張することもできるだろう (Atkinson, 2015を参照せよ)。しかし、ジェントリフィケーションが発生している状況下であっても複数の集団によって「サヴァイヴァビリティ *survivability*」が体现されているケースがあることから (Lees et al., 2018) 立ち退きが不可避であるということは否定されるべきであり、そうした「サヴァイヴァビリティ」を視野に入れることによって立ち退きを感情や経験に影響を与えるアンホーミング *un-homing* の過程として位置づけることが可能となる。そしてこのように立ち退きをより広義かつ包括的なかたちで概念化することは、ジェントリフィケーション研究において物理的な立ち退きと心理的な立ち退きの融合を促す重要な足掛かりとなり、さらに場所やホームへの現象学的帰属 *phenomenological attachments* が破壊される様子に関してより詳しい理解を促してくれる (Davidson, 2009)。なお、アンホーミングという概念には様々な程度があり、各世帯からストリート、地域、都市を超える範囲に至るまで幅広い規模やスケールを持つ過程である (Massey, 1992: 14; ホームの消失に関しては Baxter and Brickell, 2014を参照せよ)。

ジェントリフィケーションによる立ち退きを断絶の一形態とするこうした見方や概念化により、われ

われは立ち退きに関してそれまで把握されてきた側面とは異なる側面、すなわち、心に傷をつけたりトラウマを植え付けたりしながら地域や居住者に影響を及ぼすという立ち退きの性質にアプローチすることが可能となる (Graham, 2008; Till, 2012; Pain, 2019)。例えば Zhang (2018) は中国の都市再開発を事例としてジェントリフィケーションによる立ち退きが有する暴力性について明らかにしている。その研究において彼は、高齢の居住者らがアンホーミングの過程と戦争の経験に類似点を見出していることを明らかにし、そうしたアンホーミングの過程を「速く、ストレスが多く、混沌とした」 (Zhang, 2018: 201) 過程として捉えた。そしてこうしたアンホーミングの過程と戦争の暴力性の強固な結びつきというのは一見分かりにくい手段によっても再生産されており、例えば地方政府は「立ち退きの対象となる人びとの家庭、職場や学校に押し入るだけでなく、請願のための集団的抗議運動や長時間の集会に圧力をかける」 (2018: 201) といった方策も講じており、Zhang (2018) はそうした方策を地政学的対立の中で頻繁に見受けられる国家的暴力と結びつけて捉えたのであった。

いくつかの研究においては立ち退きの影響が比較的小さく見積もられているが、確かにそうした場合には立ち退きに関する議論の中で暴力性を前面に押し出して強調したり、それを議論の中心に据えて考えることは極端であるのかもしれない。例えば Young and Willmott (1957) によるロンドン東部における血縁関係に関する古典的研究においては、実際に多くの人びとが立ち退きによって生活に恩恵がもたらされたと考えていることが確認されている。そのように考える背景には、立ち退きによってインナーシティから郊外の新築の物件へと転居が強いられるが、一方でそれによって郊外の住宅において暖房、水道水、屋内トイレ、複数の寝室を恩恵として享受できるということがあった。また同様の例として Kearns and Mason (2013, 2015) によるグラスゴーでの長期的調査においても、自ら望んで転居する人と望まないかたちで転居を強いられる人とのあいだでは立ち退きによる「心理的」影響に差異があることが指摘されている。そこではグラスゴー中心部の住宅団地から立ち退かされた人びとを対象として、彼女らの健康状態への立ち退きの影響について報告されており、Kearns and Mason は結論として「転居した人の大半は住環境が『改善された』と考えたが、ただし、繰り返しになるが、地域が良くなったと言うよりは住居の状態が良くなったと考えた」 (Kearns

and Mason, 2013: 195)と述べている。

自分が暮らす住居や地域を投資対象ではなく「快適な居住空間」として考えるという現象学的な認識は「労働者階級」の人びとによって実践されている。こうした観点から考えると上記後者の調査は重要であると言える (Allen and Crookes, 2009; Davidson and Lees, 2010)。つまりそこで示されているのは、立ち退かされた住民らはたとえ住居の喪失を補填するような市場価値を新たに得られたとしても、住居を失った際にしばしば経験される思慕の情や孤独感はそのような市場価値によってでは決して埋め合わせられないということである。そして場合によっては新しい友人がどれほど多くできたとしても、新しい住居がどれほど良い空間であったとしても、新しい場所を心からホームとして感じるができないということも考えられ、立ち退かされた人びとはももとのホームや長く暮らしてきた地域に関する記憶を抱えて常に喪失の経験と向き合わなければならないのである (Jones, 2015)。さらにそうした状況には、「より良い」地域への移動という「客観的に」社会的価値のあることとして判断されることが「体系的暴力 systemic violence」——個人から直接的に被る物理的暴力ではなく「社会を組織するというまさにその実践を介して自律的に、体系的に、見えにくいたちで作動する」暴力 (Baeten et al., 2017: 643) ——の一形態となっているというある種のパラドックスを見出すことができる。

もちろん立ち退かされた住民がどこで再定着するのかということに大きく左右されるが、Crawford and Sainsbury (2017) は立ち退かされた住民を様々な地域の住宅に再定着させることは社会的ネットワークや関連する社会資本の喪失につながる可能性があると主張している (Posthumus et al., 2013も参照せよ)。また、選好という点に関して言うと、社会的地位が低い世帯は裕福な世帯よりも地元を志向して転居する傾向にあるということがLyons (1996) によって報告されており、そうした傾向には社会的地位が低い世帯の限定的な選好と社会的ネットワークを維持しようとする彼ら彼女らの強い意思が反映されている。そしてAtkinson (2003) は、こうした状況は元々暮らしていた場所に近いところで生活拠点を維持しようとする「命がけの」行為を表していると指摘している。一方、意味のある社会的関係をいかに構築することができるかという点で非常に重要となってくるのは、立ち退かされた人びとが最終的にどういった場所に行き着くのかということである。この点に関してアメリカでの研究におい

ては、立ち退かされた世帯が遠く離れたコミュニティへ再統合するケースにはほとんど成功例がないということが立証されている (Goetz, 2003; Kleit and Manzo, 2006; Newman and Wyly, 2006; Greenbaum et al., 2008)。もちろんこれは一般化できることであり、さらに若年世代の方が高齢世代よりも順応を容易であると考えているということも指摘されている。というのも、長期にわたってコミュニティに慣れ親しんできた人びとにとっては、転居という行為には全くと言っていいほどメリットがないためである (Van Crielengen, 2008)。事実、高齢世代は転居先において医療サービスの受診をためらう場合が多く、場合によっては親しいGP (訳注: 総合診療医) や薬剤師に診察してもらうために長距離の移動を行うこともある (Crawford and Sainsbury, 2017)。他方、Kleinhans (2013) は、生活を立て直す能力が高い人は「転居」の過程に対してより肯定的な考えを持つ可能性が高いため、立ち退きの経験においては年齢に加えて「個性」も重要であると主張している。なお、この研究は立ち退きのポジティブな側面に照射している数少ない研究の1つであり、結局のところほとんどの住民が新しいホームでの生活から得られる恩恵が立ち退きによって被る否定的影響を上回ると考えているということが明らかにされている。これは政府当局の言説において典型的に見受けられる文脈であり、この点に関してVigdor (2002) はサンフランシスコの報告書を引用し、立ち退かされた人びとは住宅市場における深刻かつネガティブな変化の影響を受けることはなかったと述べている。一方でサンフランシスコにおいてはHOPE VIプログラムの一環で生活苦の集団が立ち退かされたが、彼ら彼女らを対象とした長期的調査においては次のことも明らかにされている。すなわち、そうした立ち退かされた人びとの多くは住宅環境の改善によって精神状態にも改善が見られたが、新しく移り住むことになった地域の健康サービスを受けようという意思がおそらく無いということもあり、彼ら彼女らは身体的な健康状態が悪化したと感じたのであった (Seto et al., 2009)。

こうしたことは立ち退きによって及ぼされる影響が不均衡に感受されていることを示しており、この点に関してLeGates and Hartman (1986: 97) は「立ち退きは立ち退かされた集団の中でも特に低所得世帯や高齢者に対して実質的な苦難を強いている」と述べている。また身体的に脆弱な部分を抱えている人びとは特に立ち退きに際して弱い立場に陥りやすく、Philo (2005) はそうした状況を個別の出来事として

考えるのではなく、構造的過程の結果として生じる「与傷の地理geographies of wounding」として概念化することが重要であると指摘している。事実、多くの論者によって指摘されているように、立ち退きの過程は様々な感情的反応を引き起こす可能性があり、場合によってはそうした感情的反応が精神的苦痛や心的外傷後ストレス障害につながるということもある (Fried, 1966; Fullilove, 2004; Vandermark, 2007; Manzo et al., 2008; Fussell and Lowe, 2014; Crawford and Sainsbury, 2017; Pain, 2019)。また、アメリカでの1960年代の都市再生事業においては、アフリカ系アメリカ人コミュニティにおいて立ち退きの影響が最も大きいと理解されていた (Hyr, 2008. この事業と「新しい」都市再生事業を比較している)。立ち退きに要する経済的コストは個々の世帯単位で考えられるものであるが、無秩序に分断されたアメリカの都市において黒人ビジネスや社会的・政治的インフラストラクチャーが要因となって生じるコストは構造的影響をより明確に反映していた。さらに「root shock」——ジェントリフィケーションによる立ち退きに伴う経済的・社会的・心理的抑圧などによって引き起こされる心的外傷——によって、アフリカ系アメリカ人が暮らす多くの地域において社会的・政治的な活力が一層失われるということもあった (Fullilove, 2004)。

同様にロンドンを対象とした研究においては、精神的問題を抱えている弱者は立ち退きを強いられる可能性が高く、友人、家族、社会的サービスからの孤立によって鬱病や精神病のリスクが高まるということが指摘されている (Atkinson, 2000)。そして転居というのは常に多くのストレスを伴う経験であるが、移動を強いられることで生じるストレスや不安は住民を排除しようとする人びとの策略によってしばしば増幅されている。例えばLees (2014a) は彼女自身が「行政主導型ラックマニズムstate Rachmanism」と呼ぶものについて論じている。そこで彼女はロンドンのヘイゲイト団地Heygate Estateにおいて転居を拒否している最後の居住者らの排除を事例として、行政の退去担当者が文字通り住民を退去させることよりも前にガスや電気を停止し、郵便も配達しないという措置を講じたことを明らかにしている。同様にArrigoitia (2014) もプエルトリコにおいて公営住宅の取り壊しに際して借家人が脅威にさらされ不安を経験した事例について言及しており、地方政府が警察を利用して住民に圧力をかけた結果、住民の中でも特に女性が衰弱や不安を感じたり血圧の上昇に苦しむ事態につながったことが明ら

かにされている。強制退去に伴って生じるこのような影響は様々な状況においてしばしばジェンダーの問題となっており、Watt (2018) はロンドン東部の住宅団地に暮らす労働者階級の女性にみられる立ち退きの影響について報告している。Watt (2018) は一時的な滞在施設——こうした施設では頻繁に不法侵入が発生する——を転々とする立ち退かされた女性の移動を追跡し、立ち退きに伴う不安displacement anxietyや転居に伴う苦痛について論じている。そこで彼は、そうした施設において女性たちが違法薬物を使用する同居人との生活を強いられ、湿気やシラミといった衛生問題に耐えながら滞在していることを明らかにした。こうした事例はジェンダー化された社会的暴力が精神的問題の誘因となっていることを示している (ハリケーンカトリナ後に住宅の立ち退きの実施されたのだが、その立ち退きの影響に関するFussell and Loweによる2014年の分析結果と上記の事例は非常に関連性が高い)。

しかしながら、ジェントリフィケーション研究を進めるにあたっては立ち退かされた人びとを主体性を持った存在としての確に対象化する必要があり、彼ら彼女らを犠牲者として単純化して捉えてはならない (Paton, 2014を参照せよ)。北アメリカの学界では1960年代から1970年代にかけてジェントリフィケーションという用語が定着していったが、そうした中で活動家としての顔も併せ持つ研究者らがニューヨークやサンフランシスコといった都市を対象として立ち退きに立ち向かうコミュニティキャンペーンについて詳しく言及していた (Jacobs, 1961; Hartman, 1976; Hartman et al., 1982)。そして彼ら彼女らの研究が進展するにつれてジェントリフィケーションによる立ち退きへの抵抗運動はより洗練されるようになった。Maeckelbergh (2012: 670) はそうした社会運動においては「住宅を弱々しく一時的なものから[より永続的なもの]へと変化させるために、ハウジングという考え方を動員し」ながら「留まることstay put」が企図されていることを明らかにした (訳注: 引用文中の[]内の語句は訳出に際し便宜的に引用文内に挿入した)。こうした事例は大西洋の両岸で確認されており、個人、ボランティアセクター組織、公的機関のそれぞれの活動やそれらの相互のパートナーシップを通じて「留まること」は実践されている (DeVerteuil, 2012)。この「留まる」権利——これは明らかにLefebvreの都市への権利という考え方に関係している——というのは単に声高に叫んだり地域に留まることを要求するだけではなく、住民が主体性を持って移動するもしくはor留まるこ

とを意味している (Maeckelbergh, 2012)。Baeten and Listerborn (2015) が指摘しているように、「居住権」というのは人が単に自分の住居に留まることとしてではなく、より広義の「ホーム」という抽象的空間に居住する権利として理解されなければならない。その点に関して Baxter and Brickell (2014: 135) は住まいが長い時間をかけて様々な空間を横断しながら更新され再生産されていくということを強調しながら、「ホームが消失することもまたホームの回復や再建と表裏一体である」と述べている。

ジェントリフィケーションに直面した際、住民は自身の「居住権」を守るために法的手段や耳目を集めるための抗議運動を行うだけでなく、公的な仲裁に頼ったり家族間で方策を出し合うなど様々な方策を講じている (Lees and Ferreri, 2016; Watt and Minton, 2016; Hubbard and Lees, 2018)。中でも集団的な「共通の敵に対する抵抗」(Arrigoitia, 2014: 175) によって物質的な利益だけではなく矜持の感覚が芽生え、さらにそうした感覚は大規模なパブリックミーティングやデモンストレーションにおいて最高潮に達する (Robinson, 1995; Ghaffari et al., 2018; Watt, 2016を参照せよ)。このようなかたちで居住権は単にある地域において1つのホームを持つということを超えて、何らかの恩恵を得られる空間や組織、コミュニティを形成する空間や組織、パブリックな空間や組織を利用し続ける権利にまで拡張し、そうした権利を守るという尊厳も含むようになる (Davidson, 2009)。しかし抵抗は複雑かつ不均衡なものであり、なおかつ抵抗を行うことによって仕事のような必要不可欠なことや家族や居候の世話などへ影響が出る可能性が危惧されている。プエルトリコではジェントリフィケーションによる立ち退きに反対している複数の住民が反対運動への参加によって他の住居を見つける労力が削がれることを懸念しており、また住居の取り壊しを正当化するためにメディアが特にシングルマザーに対して無責任な独り親というジェンダー化された比喩表現を宛がうということもあった (Arrigoitia, 2014)。

そうした不平等が存在しているにもかかわらず、留まることや「居住権」を求める闘争が反ジェントリフィケーション運動における中心的要求であり続けているという事実は、立ち退きがジェントリフィケーションの過程において中心的要素となっているということを再認識させてくれる。さらにそれはそうした社会運動を排他的な抑圧に関する証拠として捉え、アンホーミングへの抵抗の中で提示される要求に焦点をあてることの必要性を示唆している。ジェ

ントリフィケーションや「都市再生」をめぐる展開されるパブリックな言説においては立ち退かされる人びとが頻繁に客体化されスティグマ化されている。その点を踏まえると、立ち退きに直面する中で人びとがいかに生き抜き、また立ち退きに抵抗しているのかということを調査する場合には、上記のような社会運動に対して立ち退きに関する発言の機会を提供することが単に重要であるだけでなく不可欠なこととなる。

IV章 立ち退きの時代性

立ち退きが暴力の一形態となりうるという前提に立脚するならば、それは次のことを意味することになる。すなわち短期間に生じる直接的な立ち退きと長期的に進行する間接的な立ち退きの両方に注意深く向き合わなければならない、変化の一部分を切り取り、それを根拠として立ち退きが損害の原因となっているのか否かを結論づけてはならない。そこで関連する例として、重要な都市開発を進めるために実施される既存住民の転居のような政府主導のジェントリフィケーションに付随して発生する暴力的な立ち退きについて考えてみたい (Chan, 1986; Crump, 2002; Short, 2008; Melih Cin and Egercioglu, 2015; Zhang, 2018)。2012年のロンドンオリンピック開催に向けた再開発のようなインフラストラクチャーの開発事業による立ち退きは好例で (Davis and Thornley, 2010)、同様のケースとして2010年のバンクーバーでの冬季オリンピック (Vanwynsberghe et al., 2013)、2014年のグラスゴーでのコモンウェルスゲームズ Commonwealth Games (Paton et al., 2012; Gray and Porter, 2015を参照せよ)、リオデジャネイロでの2014年のFIFAワールドカップや2016年のオリンピック (Perelan, 2012; Zirin, 2014) を挙げることができる。上記の各ケースにおいては労働者階級や生活が不安定な住民に対して大会開催前に強制的な立ち退きが実施された。そしてその背景ではスポーツイベントそのものが開催地域の周辺住民の健康や経済状況にとって有益であるということが前提とされ、そうしたスポーツイベントによってもたらされる国益や啓蒙的影響に言及される中で立ち退きも正当化された。しかしながら、皮肉なことにそうしたスポーツ関連のメガイベントによって恩恵が受けられると想定されていた住民は最終的には立ち退かされたのであった。ロンドンの事例に関して言えば、急激な地価の高騰や投機目的の過剰な商業地開発・

宅地開発がオリンピックの遺産となった。なおロンドンにおいては公営住宅を構成している社会住宅物件が「市場価格」で販売される物件に置き換えられる状況が続いてきたが、そうした置き換えが進行する多くの元公営住宅にオリンピックの遺産の影響が及び、オリンピックが開催された特別区は地元住民にとってますます暮らしにくい場所となった (Watt, 2013; Frediani et al., 2013)。

このように立ち退きには政府によって引き起こされ実行に移される単一の立ち退き行為もあるが、一方で住民だけでなく産業やビジネスを長い時間をかけて立ち退かせるような小規模な圧力を介して実施される立ち退きもある。Curran (2007) が指摘しているように、例えば産業分野における立ち退きには産業不動産の断片的なターゲット化によるものも含まれており、そうしたターゲット化は不動産デベロッパー、プランナー、地主によって通常は比較的緩やかに展開されている。またCampkin and Marshall (2017) もロンドンのLGBTのナイトライフに関する研究においてそうした徐々に広く展開されていくような変化の傾向に言及している。彼らはロンドンの「庶民的な」クラブの数が2007年から2016年にかけて44%減少しており、デベロッパーがそうしたクラブを徐々に住宅物件へと転換し、ロンドンでの家賃高騰に乗じて収益を得ている状況を明らかにしている (LGBT住民へのジェントリフィケーションの影響に関する研究としてはDoan and Higgins, 2011も参照せよ)。

こうした点はジェントリフィケーションや地域変容に付随して生じる「緩やかな暴力」についてのKern (2016) の指摘と特に関連性が高い。KernはNixonの『貧困にみる緩やかな暴力と環境主義Slow Violence and the Environmentalism of the Poor』(2011) を引き合いに出し「緩やかな暴力」という用語を使用しながら、インナーシティ地区をヒップスター地区へと変容させるようなクールな消費空間や「健康志向の」消費空間 (例: オーガニックカフェ、小規模の地ビール醸造店、コーヒーショップ) が徐々に台頭してくる状況を明らかにしている。彼女が指摘しているように「真正正銘のインナーシティ・リミナリティ authentic inner city liminality」からジェントリファイされた光景への移行というのは緩やかに生じるものである。

様々な出来事が生じたり真正性に関する特定の考え方が広がることによって日常性が再定義され始めると、周縁化された集団は日常生活との断絶を

経験するようになり、それはさらに彼ら彼女らに対する強力な立ち退きの圧力となっていく。多くの場合、こうした立ち退きはごくごくありふれた、非破壊的で、出来事とも言えない出来事を内容としている。例えばカフェの外にあるベンチを撤去すると喫煙シェルター付近で座って喫煙する場所がなくなる。すると地元のすべての店舗でコーヒーの価格が上昇する。セックスワーカーたちは線路の北側へと移動する。仕事を退職した男性たちは各々でポーチに座るようになる。「徘徊禁止」の標識が現れる。こうした出来事とも言えない出来事は…ジェントリフィケーションによって引き起こされる構造的で破壊的な変化だけではなく、醜くて慢性的な都市の不平等の中に存在する日常の中の緩やかな暴力にも目を向けることをわれわれに求めている。(Kern, 2016: 453)

また、「転居してきた」住民のアイデンティティは緩やかなペースによってのみ書き換えられるものであり、彼ら彼女らが「グローバルジェントリフィケーション」のサイクルに統合されるのには時間を要するという考え方が、ロンドン南部のペッカムPeckhamとダルウィッチDulwichの変化を調査したBenson and Jackson (2013) によって提示されている。大規模なスポーツイベントや開発事業は反対運動や法的対抗処置を引き起こしたり、メディアの報道によって注目を集めるといったことにもつながる。しかし、そうしたイベントや再開発事業に付随して生じる「ファストな」ジェントリフィケーションや暴力と対照的であるのが緩やかなジェントリフィケーションである。この緩やかなジェントリフィケーションは小売店の散発的な変化、地元経済の再生、不動産価格の段階的上昇などを伴いながら進行するため、あからさまな係争を引き起こしにくい (Håkansson, 2017を参照せよ)。これは部分的には、地域変容のペースが緩やかであるために転入者であるニューミドルクラスがコミュニティの代表者となる状況が生まれたり、そうした転入者自身が実際にはジェントリフィケーションの元凶であるにもかかわらず自分たちをジェントリフィケーションに反対する立場に位置づけている場合などがあるためである。同様の例は他の地域でも確認されており、例えばBernt and Holm (2009) はベルリンのプレントラウアーベルクPrenzlauer Bergを調査し、伝統的な労働者階級の住宅街区への「ヤッピーバーyuppie bar」の流入やそうした地域での家賃の高騰をミドルクラス住民らが非難していたが、かつては彼ら彼女らが統一以前の時代にその地域に暮らしていた労働者階級

住民を立ち退かせていたということを明らかにしている。

特に立ち退きが人びとに与える影響を捉える場合には、社会的正義・空間的正義に関連している立ち退きの輪郭を明らかにするという意味でも、立ち退きの時代性に関する上記のような調査は重要となってくる。中でも特に重要であるのは、立ち退きは決して一度限りの出来事ではなく、長期間にわたって展開され様々な摩擦を生み出す小さな出来事を内容としているということであり、その影響を受ける人びとの中に様々な感情や心理状態(不安、希望、困惑、心配、混乱、喪失、期待、恐怖)をつくり出すということである (Lombard, 2013を参照せよ)。ストックホルム近辺での「百万団地million estates」の取り壊しのような強制的立ち退きに関するいくつかの事例においては、再開発の実施が発表されてから賃借人やリースホルダーleaseholderが自分たちにこれから何が起ころのかを知るまでに数年を要したということがあった (Baeten et al., 2017)。そしてその間にフリーホルダーfreeholderは退去することになり、地域は砂漠化し始め、種々のサービスが立ち行かなくなった。そうしたケースにおいてはもはや地域を改善するインセンティブが存在しておらず、住民が将来のためにいかにして計画を立てるべきかという見通しも明確でなくなり、住民の人生は実質的に宙づり状態となった。そうして現状に捕らえられた住民らは何らかの出来事が生じるよりも前に立ち退かされるのである。宙づり状態での生活によって生じうる心理的・身体的影響は多岐にわたり、立ち退きが住民のホームの空間にいかなる影響を与え、それが羞恥、ストレス、不安といった感情につながるのかということは、転居先で落ち着くまでの煩雑かつ疲労を伴う過程の中で浮かび上がる (Wallace, 2015)。そして最終的には住民の個々人が心理的・身体的に消耗し、立ち退きに対する効果的な抗議活動が困難な状態へとつながる (Lacione, 2017)。その点から言えば、都市において立ち退きを経験している人びとの経験と「虚無状態」の中でホームをつくり出す国際難民や移民の経験には重要な共通項を見出すことができる (Brun and Fábos, 2017を参照せよ)。ジェントリフィケーションによる立ち退きを検討する上では各時代の社会的不平等や空間的不均衡に注意を払う必要があり、さらに健康状態や生活の質、幸福に対する立ち退きの悪影響に注目することも必要である。

V章 結論

多くのジェントリフィケーション研究においては地価や賃料に関する問いが検討されているが、本稿においてわれわれはジェントリフィケーションの定義の要素である立ち退きを議論の中心に据えてきた。そしてここまでの議論が示しているのは、われわれは都市における立ち退きは何たるかということ、そして都市における立ち退きをいかに的確に概念化しうるのかということについてより明快な理解を必要としているということである。この点に関して今では古典となっているMarcuse (1986) のジェントリフィケーションによる立ち退きの概念化は依然として有効なものであるものの、それが1980年代のニューヨーク市の住宅市場という文脈と時代の産物であるということには留意しなければならない。さらに言うならば、現代ではジェントリフィケーションによる立ち退きはグローバルなスケールで発生している。しかし、そうであるにもかかわらず、そうした立ち退きの多様な性質に注目し、立ち退きに関してアップデートされた概念化を提示しようとする意識があまりに僅少であることは驚くべきことである。実際のところ都市型ジェントリフィケーションの概念化や類型化の方が立ち退きの概念化よりもはるかに充実している。しかしMarcuse (2010: 87) が指摘しているように「われわれが立ち退きに伴って生じる苦痛をジェントリフィケーション研究において検討していることの中心的要素としないとする...それはただ単に複数の要素から成る数式の1つの要素を見落としているだけではない。つまり、その時われわれは検討されるべき中心的ポイントを見落としているのである」。

本稿においてわれわれは、ジェントリフィケーションによる立ち退きが特定のコミュニティやホーム空間への帰属意識を取り去る暴力の一種であるということに言及しながら、ジェントリフィケーションによる立ち退きを他の自発的移動の例とは明らかに異なる——しかしそうした自発的移動との関連性はある——アンホームিংの一形態として考えてきた。このようにある地域から別の地域へと強制的に住民を移動させることを、開拓移民による植民地化のもとで現地住民が経験した略奪や国家を失いナショナルアイデンティティを剥奪された難民が経験する苦境などと同列に扱うような主張は誤っている。しかし、それらはすべて精神的・身体的苦痛を負わせる可能性をもった暴力の形態であることに変わりはないため綿密に調査されるべきであるとわれ

われは強く主張してきた。そして立ち退きは労働者階級、女性、エスニックマイノリティ、複合的な困窮状態にある人など社会的弱者に対して特に大きな影響を及ぼすため、立ち退きに伴う精神的・身体的苦痛は不均衡に分布することになる。そしてこの事実は、立ち退きが一種の社会的・空間的正義の不公平な在り方であるということをわれわれに想起させてくれる。「『転居する権利』というのも人生における避け難い一つの現実として横たわっている」(Hartman, 1984: 533)が、われわれは都市への権利に想像力を働かせる（もしくはその権利を実際に行使する）上では「留まる権利the right to stay put」を基礎とすべきであると主張した（Hubbard and Lees, 2018）。ただし、ホームとなっているコミュニティに想像力を働かせることが根本的に包摂的ではなく、時に排他的となる可能性もあるため、その点を踏まえると「留まる権利」という概念は常に問題含みではある（Imbroscio, 2004）。しかし、現代都市におけるジェントリフィケーションの影響力の拡大を考えると、「留まる権利」が都市への他の権利（例えば都市資源や都市サービスにアクセスする権利やそれらを守る権利）を維持するための重要な土台となる。

なおわれわれは、短期的なものであろうと長期的なものであろうと立ち退きは地域でのジェントリフィケーションの当然の成り行きであるということを主張してきたが、ジェントリフィケーションや地域の社会的向上に際して必ず立ち退きが発生していることを裏付ける決定的根拠が欠如している以上、当然のことながらわれわれの主張は問い直されなければならない。その上でそうした決定的根拠を確立するという目的を果たすためには——そして「立ち退き」や「入れ替わり」のモデルを取り入れている人びとのあらゆるイデオロギーの分裂に決着をつけるためにも——立ち退きの発生を示す確固たるデータが必要となる。そしてわれわれは本稿において、都市におけるジェントリフィケーションによる立ち退きを調査する上ではジェントリフィケーションの種類（そこには不動産の多種多様な形態や契約所有形態も含まれる）に加えて、ジェントリフィケーションの過程のスケールscaleやスピードspeedを考慮しなければならないということを確認した。既述のとおり、立ち退きというのは単に富裕層によって貧困層が直接的に取って代わられることを意味しているのではなく、定着している住民を疎外する社会的・経済的・文化的変容を含むものでもある。またそこには社会的弱者や生活が不安定な人びとがあまり対抗することのできない直接的かつ強制的な剥奪行

為、そして、特定の地域の快適性を減退させ、定着している住民をそうした環境に順応させるといった緩やかな暴力も含められる。そしてそれは、様々な都市においてジェントリフィケーションによる立ち退きを把握できるような単一の手法など存在するはずがなく、また、立ち退きを把握する単純な計測方法（例えば、ある地域における社会的・経済的な混淆状況や物件の契約所有形態の変化を示すセンサス指標）ではもはや不十分であるということを示唆している。そうしたものに代わるものとしてわれわれが求めているのは、都市に暮らし立ち退きに直面してきた低所得者層の生きた経験の解明を可能にし、最も弱い立場にある人びとに暴力的なインパクトを与えるアンホーミングの過程の剔抉に与するデータである。

References

- Allen, C. and Crookes, L. (2009) Fables of the reconstruction: A phenomenology of 'place shaping' in the north of England. *The Town Planning Review* 80(4/5): 455-480.
- Allinson, J. (2006) Over-educated, over-exuberant and over here? The impact of students on cities. *Planning Practice & Research* 21: 79-94.
- Arrigoitia, M. F. (2014) Agency, ambivalence and emotions in a public housing anti-demolition struggle. In: Jones, H. and Jackson, E. (eds) *Stories of Cosmopolitan Belonging: Emotion and Location*. London: Routledge.
- Ascensão, E. (2015) Slum gentrification in Lisbon, Portugal: Displacement and the imagined futures of an informal settlement. In: Lees, L., Shin, H. and Lopez-Morales, E. (eds) *Global Gentrifications: Uneven Development and Displacement*. Bristol: Policy Press, 37-58.
- Atkinson, R. (2000) The hidden costs of gentrification: Displacement in central London. *Journal of Housing and the Built Environment* 15: 307-326.
- (2003) Domestication by cappuccino or a revenge on urban space? Control and empowerment in the management of public spaces. *Urban Studies* 40(9): 1829-1843.
- (2015) Losing one's place: Narratives of neighbourhood change, market injustice and symbolic displacement. *Housing, Theory and Society* 32: 373-388.
- Baeten, G. and Listerborn, C. (2015) Renewing urban renewal in Landskrona, Sweden: Pursuing displacement through housing policies. *Geografiska Annaler: Series B, Human Geography* 97: 249-261.
- Baeten, G., Westin, S., Pull, E. and Molina, I. (2017) Pressure and violence: Housing renovation and displacement in Sweden. *Environment and Planning A* 49: 631-651.

- Baxter, R. and Brickell, K. (2014) For home unmaking. *Home Cultures* 11: 133-143.
- Benson, M. and Jackson, E. (2013) Place-making and place maintenance: Performativity, place and belonging among the middle classes. *Sociology* 4: 793-809.
- Bernt, M. and Holm, A. (2009) Is it, or is not? The conceptualisation of gentrification and displacement and its political implications in the case of Berlin-Prenzlauer Berg. *City* 13: 312-324.
- Billingham, C. M. (2017) Waiting for Bobos: Displacement and impeded gentrification in a Midwestern city. *City & Community* 16: 145-168.
- Boddy, M. (2007) Designer neighbourhoods: New-build residential development in nonmetropolitan UK cities —the case of Bristol. *Environment and Planning A* 39: 86-105.
- Bonds, A. and Inwood, J. (2016) Beyond white privilege: Geographies of white supremacy and settler colonialism. *Progress in Human Geography* 40: 715-733.
- Brickell, K., Arrigoitia, M. F. and Vasudevan, A. (2017) Geographies of forced eviction: Dispossession, violence, resistance. In: Brickell, K., Arrigoitia, M. F. and Vasudevan, A. (eds) *Geographies of Forced Eviction*. London: Palgrave Macmillan.
- Brown-Saracino, J. (2004) Social preservationists and the quest for authentic community. *City & Community* 3: 135-156.
- Brun, C. and Fábos, A. H. (2017) Mobilizing home for longterm displacement: A critical reflection on the durable solutions. *Journal of Human Rights Practice* 2: 177-183.
- Campkin, B. and Marshall, L. (2017) LGBTQ+ Cultural Infrastructure in London: *Night Venues, 2006-Present*. London: UCL Urban Laboratory.
- Chan, K. B. (1986) Ethnic urban space, urban displacement and forced relocation: The case of Chinatown in Montreal. *Canadian Ethnic Studies* 18: 65-78.
- Chum, A. (2015) The impact of gentrification on residential evictions. *Urban Geography* 36(7): 1083-1098.
- Crawford, B. and Sainsbury, P. (2017) Opportunity or loss? Health impacts of estate renewal and the relocation of public housing residents. *Urban Policy and Research* 35: 137-149.
- Crump, J. (2002) Deconcentration by demolition: Public housing, poverty, and urban policy. *Environment and Planning D: Society and Space* 20: 581-596.
- Cummings, J. (2015) Confronting favela chic: The gentrification of informal settlements in Rio de Janeiro, Brazil. In: Lees, L., Shin, H. and Lopez-Morales, E. (eds) *Global Gentrifications: Uneven Development and Displacement*. Bristol: Policy Press, 81-100.
- Curran, W. (2007) 'From the frying pan to the oven': Gentrification and the experience of industrial displacement in Williamsburg, Brooklyn. *Urban Studies* 44: 1427-1440.
- Davidson, M. (2009) Displacement, space/place and dwelling: Placing gentrification debate. *Ethics, Place and Environment* 12: 219-234.
- Davidson, M. and Lees, L. (2005) New-build 'gentrification' and London's riverside renaissance. *Environment and Planning A* 37: 1165-1190.
- (2010) New-build gentrification: Its histories, trajectories, and critical geographies. *Population, Space and Place* 16: 395-411.
- Davidson, M. and Wyly, E. (2012) Class-ifying London: Questioning social division and space claims in the post-industrial metropolis. *City* 16: 395-421.
- Davis, J. and Thornley, A. (2010) Urban regeneration for the London 2012 Olympics: Issues of land acquisition and legacy. *City, Culture and Society* 1: 89-98.
- Delaney, D. (2004) Tracing displacements: Or evictions in the nomosphere. *Environment and Planning D: Society and Space* 22: 847-860.
- Desmond, M. (2012) Eviction and the reproduction of urban poverty. *American Journal of Sociology* 118: 88-133.
- DeVerteuil, G. (2012) Resisting gentrification-induced displacement: Advantages and disadvantages to 'staying put' among non-profit social services in London and Los Angeles. *Area* 44(2): 208-216.
- Doan, P. L. and Higgins, H. (2011) The demise of queer space? Resurgent gentrification and the assimilation of LGBT neighborhoods. *Journal of Planning Education and Research* 31(1): 6-25.
- Doucet, B., Van Kempen, R. and Van Weesep, J. (2011) 'We're a rich city with poor people': Municipal strategies of new-build gentrification in Rotterdam and Glasgow. *Environment and Planning A* 43: 1438-1454.
- Engels, F. (1975 [1872]) *The Housing Question*. London: Central Books.
- Frediani, A. A., Butcher, S. and Watt, P. (2013) *Regeneration and Well-Being in East London: Stories from Carpenters Estate*. SDP Students Report, London School of Economics.
- Freeman, L. (2005) Displacement or succession? Residential mobility in gentrifying neighborhoods. *Urban Affairs Review* 40: 463-491.
- Fried, M. (1966) Grieving for a lost home: The psychological costs of relocation. In: Wilson, J. (ed.) *Urban Renewal: The Record and the Controversy*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Fullilove, M. (2004) *Root Shock: How Tearing Up City Neighborhoods Hurts America, and What We Can Do About It*. New York: One World/Ballantine Books.
- Fussell, E. and Lowe, S. R. (2014) The impact of housing displacement on the mental health of low-income parents after Hurricane Katrina. *Social Science & Medicine* 113: 137-144.
- Ghaffari, L., Klein, J.-L. and Angulo Baudin, W. (2018) Toward a socially acceptable gentrification: A review of strategies and practices against displacement. *Geography Compass* 12: 123-155.
- Ghertner D. A. (2014). India's urban revolution: Geographies of displacement beyond gentrification. *Environment and Planning A* 46: 1554-1571.
- Glass, R. (1964) Introduction: Aspects of change. In: Centre for Urban Studies (eds) *London: Aspects of Change*. London: MacKibbon and Kee.
- Glassman, J. (2006) Primitive accumulation, accumulation by dispossession, accumulation by 'extra-economic' means. *Progress in*

- Human Geography* 30: 608-625.
- Goetz, E. G. (2003) *Clearing the Way: Deconcentrating the Poor in Urban America*. Washington, DC: The Urban Institute.
- Graham, S. (ed.) (2008) *Cities, War, and Terrorism: Towards an Urban Geopolitics*. Chichester: John Wiley & Sons.
- Graif, C. (2016) (Un)natural disaster: Vulnerability, longdistance displacement, and the extended geography of neighborhood distress and attainment after Katrina. *Population and Environment* 37(3): 288-318.
- Gray, N. and Porter, L. (2015) By any means necessary: Urban regeneration and the 'state of exception' in Glasgow's Commonwealth Games 2014. *Antipode* 47: 380-400.
- Greenbaum, S., Hathaway, W., Rodriguez, C., Spalding, A. and Ward, B. (2008) Deconcentration and social capital: Contradictions of a poverty alleviation policy. *Journal of Poverty* 12: 201-228.
- Hamnett, C. (2003) Gentrification and the middle-class remaking of inner London, 1961-2001. *Urban Studies* 40: 2401-2426.
- Håkansson, I. (2017) The socio-spatial politics of urban sustainability transitions: Grassroots initiatives in gentrifying Peckham. *Environmental Innovation and Societal Transitions* 29: 34-46.
- Hartman, C. (1976) Evaluation criteria for urban renewal. *Journal of Architectural Education* 29(4): 30-32.
- (1984) The right to stay put. In: Geisler, C. and Popper, F. J. (eds) *Land Reform, American Style*. Lanham: Rowman and Littlefield.
- Hartman, C., Keating, D., LeGates, R. and Turner, S. (1982) *Displacement: How to Fight It*. Berkeley, CA: National Housing Law Project.
- Harvey, D. (2004) The 'new imperialism': Accumulation by dispossession. *Socialist Register* 40: 63-87.
- He, S. (2010) New-build gentrification in central Shanghai: Demographic changes and socioeconomic implications. *Population, Space and Place* 16: 345-361.
- Helbrecht, I. (2017) Gentrification and displacement. In: Helbrecht, I. (ed.) *Gentrification and Resistance: Research Displacement Processes and Adaption Strategies*. Wiesbaden: Springer.
- Henig, J. R. (1980) Gentrification and displacement within cities: A comparative analysis. *Social Science Quarterly* 61: 638-652.
- Hern, M. (2016) *What a City Is For: Remaking the Politics of Displacement*. Boston, MA: MIT Press.
- Hochstenbach, C. and Musterd, S. (2018) Gentrification and the suburbanization of poverty: Changing urban geographies through boom and bust periods. *Urban Geography* 39: 26-53.
- Hodkinson, S. (2012) The new urban enclosures. *City* 16: 500-518.
- Hubbard, P. (2017) *The Battle for The High Street: Retail Gentrification, Class and Disgust*. London: Macmillan.
- Hubbard, P. and Lees, L. (2018) The right to community? Legal geographies of resistance on London's gentrification frontiers. *City* 22(1): 8-25.
- Huse, T. (2014) *Everyday Life in the Gentrifying City: On Displacement, Ethnic Privilege and the Right to Stay Put*. London: Routledge.
- Hyra, D. (2008) *The New Urban Renewal: The Economic Transformation of Harlem and Bronzeville*. Chicago: University of Chicago Press.
- Imbroscio, D. (2004) Can we grant a right to place? *Politics & Society* 32: 575-609.
- Jackson, L. K. (2017) The complications of colonialism for gentrification theory and Marxist geography. *Journal of Law & Social Policy* 27: 43-66.
- Jacobs, J. (1961) *The Death and Life of Great American Cities*. New York: Random House.
- Janoschka, M. and Sequera, J. (2016) Gentrification in Latin America: Addressing the politics and geographies of displacement. *Urban Geography* 37: 1175-1194.
- Johnson, J. H. (1983) The role of community action in neighbourhood revitalization. *Urban Geography* 4: 16-39.
- Jones, O. (2015) 'Not promising a landfall...': An autotopographical account of loss of place, memory and landscape. *Environmental Humanities* 6: 1-27.
- Kearns, A. and Mason, P. (2013) Defining and measuring displacement: Is relocation from restructured neighbourhoods always unwelcome and disruptive? *Housing Studies* 28: 177-204.
- Kearns, A. and Mason, P. (2015) Regeneration, relocation and health behaviours in deprived communities. *Health & Place* 32: 43-58.
- Kern, L. (2009) Gendering reurbanisation: Women and new-build gentrification in Toronto. *Population, Space and Place* 16: 363-379.
- (2016) Rhythms of gentrification: Eventfulness and slow violence in a happening neighbourhood. *Cultural Geographies* 23: 441-457.
- Kleinhans, R. (2003) Displaced but still moving upwards in the housing career? Implications of forced residential relocation in the Netherlands. *Housing Studies* 18: 473-499.
- Kleit, R. G. and Manzo, L. (2006) To move or not to move: Relationships to place and relocation choices in HOPE VI. *Housing Policy Debate* 17: 271-308.
- Lancione, M. (2017). Micropolitical entanglements: Positioning and matter. *Environment and Planning D: Society and Space* 35(4): 574-578.
- Lees, L. (2014) The urban injustices of New Labour's 'new urban renewal': The case of the Aylesbury Estate in London. *Antipode* 46: 921-947.
- Lees, L. and Ferreri, M. (2016) Resisting gentrification on its final frontiers: Learning from the Heygate Estate in London (1974-2013). *Cities* 57: 14-24.
- Lees, L., Annunziata, S. and Rivas-Alonso, C. (2018) Resisting planetary gentrification: The value of survivability in the fight to stay put. *Annals of the Association of American Geographers* 108: 346-355.
- Lees, L., Shin, H. and Lopez-Morales, E. (eds) (2015) *Global Gentrifications: Uneven Development and Displacement*. Bristol: Policy Press.

- Lees, L., Shin, H. and Lopez-Morales, E. (2016) *Planetary Gentrification*. Cambridge: Polity Press.
- LeGates, R. and Hartman, C. (1986) The anatomy of displacement in the US. In: Smith, N. and Williams, P. (eds) *Gentrification of the City*. London: Unwin Hyman.
- Ley, D. (2003) Artists, aestheticisation and the field of gentrification. *Urban Studies* 40: 2527-2544.
- Lombard, M. (2013) Struggling, suffering, hoping, waiting: Perceptions of temporality in two informal neighbourhoods in Mexico. *Environment and Planning D: Society and Space* 31: 813-829.
- Lunstrum, E. (2016) Green grabs, land grabs and the spatiality of displacement: Eviction from Mozambique's Limpopo National Park. *Area* 48: 142-152.
- Lyons, M. (1996) Gentrification, socioeconomic change, and the geography of displacement. *Journal of Urban Affairs* 18: 39-62.
- Maeckelbergh, M. (2012) Mobilizing to stay put: Housing struggles in New York City. *International Journal of Urban and Regional Research* 36: 655-673.
- Manzo, L. C., Kleit, R. G. and Couch, D. (2008) 'Moving three times is like having your house on fire once': The experience of place and impending displacement among public housing residents. *Urban Studies* 45: 1855-1878.
- Marcuse, P. (1986) Abandonment, gentrification, and displacement: The linkages in New York City. In: Smith, N. and Williams, P. (eds) *Gentrification of the City*. Boston: Allen and Unwin, 121-152.
- (2010) A note from Peter Marcuse. *City* 14: 187-188.
- Massey, D. (1992) A place called home. *New Formations* 17: 3-15.
- McKinnish, T., Walsh, R. and White, K. T. (2009) Who gentrifies low-income neighbourhoods? *Journal of Urban Economics* 67: 180-193.
- Melih Cin, M. and Egercioglu, Y. (2015) A critical analysis of urban regeneration projects in Turkey: Displacement of Romani settlement case. *Social and Behavioural Sciences* 216: 269-278.
- Newman, K. and Wyly, E. K. (2006) The right to stay put, revisited: Gentrification and resistance to displacement in New York City. *Urban Studies* 3: 23-57.
- Nixon, R. (2011) *Slow Violence and the Environmentalism of the Poor*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Nowicki, M. (2014) Rethinking domicile: Towards an expanded critical geography of home. *Geography Compass* 8: 785-795.
- Oslender, U. (2016) The banality of displacement: Discourse and thoughtlessness in the internal refugee crisis in Colombia. *Political Geography* 50: 10-19.
- Owens, A. (2012) Neighborhoods on the rise: A typology of neighborhoods experiencing socioeconomic ascent. *City & Community* 11: 345-369.
- Pain, R. (2019) Chronic urban trauma: The slow violence of housing dispossession. *Urban Studies* 56(2): 385-400.
- Paton, K. (2014) *Gentrification: A Working Class Perspective*. Aldershot: Ashgate.
- Paton, K., Mooney, G. and McKee, K. (2012) Class, citizenship and regeneration: Glasgow and the Commonwealth Games 2014. *Antipode* 44: 1470-1489.
- Perelan, M. (2012) *Barbaric Sport: A Global Plague*. London: Verso.
- Philo, C. (2005) The geographies that wound. *Population, Space, Place* 11: 441-454.
- Porteous, D. (1988) Topocide: The annihilation of place. In: Eyles, J. and Smith, D. M. (eds) *Qualitative Methods in Human Geography*. Cambridge: Polity Press.
- Porteous, D. and Smith, S. E. (2002) *Domicide: The Global Destruction of Home*. Toronto: McGill Queen's University Press.
- Posthumus, H., Bolt, G. and Van Kempen, R. (2013) Why do displaced residents move to socioeconomically disadvantaged neighbourhoods? *Housing Studies* 28: 272-293.
- Pratt, A. (2009) Urban regeneration: From the arts 'feel good' factor to the cultural economy: A case study of Hoxton, London. *Urban Studies* 46: 1041-1061.
- Rerat, P., Soderstrom, O., Piguet, E. and Besson, R. (2010) From urban wastelands to new-build gentrification: The case of Swiss cities. *Space and Place* 16: 429-442.
- Robinson, T. (1995) Gentrification and grassroots resistance in San Francisco's Tenderloin. *Urban Affairs Review* 30(4): 483-513.
- Rose, D. (1996) Economic restructuring and the diversification of gentrification in the 1980s: A view from a marginal metropolis. In: Caulfield, J. and Peake, L. (eds) *City Lives and City Forms: Critical Research and Canadian Urbanism*. Toronto: University of Toronto Press.
- Rose, D. (2010) Local state policy and 'new-build gentrification' in Montreal: The role of the 'population factor' in a fragmented governance context. *Population, Space and Place* 16: 413-428.
- Seto, E., Chao, C., Dill, L., Gilhuly, K., Kontigis, C., Breslar, J. and Negev, M. (2009) *HOPE VI to HOPE SF, San Francisco Public Housing Redevelopment: A Health Impact Assessment*. Berkeley: University of California Press.
- Shaw, K. (2008) Gentrification: What it is, why it is, and what can be done about it? *Geography Compass* 2: 1697-1728.
- Shaw, K. and Hagemans, I. (2015) 'Gentrification without displacement' and the consequent loss of place: The effects of class transition on low-income residents of secure housing in gentrifying a. *International Journal of Urban and Regional Research* 39: 323-341.
- Shin, H. and Lopez-Morales, E. (2018) Beyond AngloAmerican gentrification theory. In: Lees, L. and Phillips, M. (eds) *Handbook of Gentrification Studies*. Cheltenham: Edward Elgar, 13-25.
- Short, J. R. (2008) Globalization, cities and the Summer Olympics. *City* 12: 321-340.
- Slater, T. (2006) The eviction of critical perspectives from gentrification research. *International Journal of Urban and Regional Research* 30: 737-757.
- (2009) Missing Marcuse: On gentrification and displacement. *City* 13: 292-311.
- Slater, T., Curran, W. and Lees, L. (2004) Gentrification research: New directions and critical scholarship. *Environment and Plan-*

- ning *A* 36: 1141-1150.
- Smart, A. and Smart, J. (2017) Ain't talkin' 'bout gentrification: The erasure of alternative idioms of displacement resulting from Anglo-American academic hegemony. *International Journal of Urban and Regional Research* 41: 518-525.
- Smith, D. (2004) Studentification: The gentrification factory? In: Atkinson, R. and Bridge, G. (eds) *Urban Colonialism: Gentrification in a Global Context*. London: Routledge.
- Smith, N. (2002) New globalism, new urbanism: Gentrification as global urban strategy. *Antipode* 34: 427-450.
- Sullivan, D. M. (2007) Reassessing gentrification: Measuring residents' opinions using survey data. *Urban Affairs Review* 42(4): 583-592.
- Till, K. E. (2012) Wounded cities: Memory-work and a place-based ethics of care. *Political Geography* 31: 3-14.
- Van Criekingen, M. (2008) Towards a geography of displacement: Moving out of Brussels' gentrifying neighbourhoods. *Journal of Housing and the Built Environment* 23(3): 199-213.
- Van Criekingen, M. and Decroly, J. (2003) Revisiting the diversity of gentrification: Neighbourhood renewal processes in Brussels and Montreal. *Urban Studies* 40: 2451-2468.
- Vandermark, L. M. (2007) Promoting the sense of self, place, and belonging in displaced persons: The example of homelessness. *Archives of Psychiatric Nursing* 21(5): 241-248.
- Van Weesep, J. (1994) Gentrification as a research frontier. *Progress in Human Geography* 18: 74-83.
- Vanwynsberghe, R., Surborg, B. and Wyly, E. (2013) When the games come to town: Neoliberalism, mega-events and social inclusion in the Vancouver 2010 Winter Olympic Games. *International Journal of Urban and Regional Research* 37: 2074-2093.
- Vigdor, J. (2002) Does gentrification harm the poor? *Brookings-Wharton Papers on Urban Affairs* 134-173.
- Visser, G. and Kotze, N. (2008) The state and new-build gentrification in central Cape Town, South Africa. *Urban Studies* 45: 2565-2593.
- Wallace, A. (2015) Gentrification interrupted in Salford, UK: From new deal to 'limbo-land' in a contemporary urban periphery. *Antipode* 47: 517-538.
- Watt, P. (2005) Housing histories and fragmented middleclass careers: The case of marginal professionals in London council housing. *Housing Studies* 20: 359-381.
- (2013) 'It's not for us' regeneration, the 2012 Olympics and the gentrification of East London. *City* 17: 99-118.
- (2016) A nomadic war machine in the metropolis: En/countering London's 21st-century housing crisis with Focus E15. *City* 20: 297-320.
- (2018) 'This pain of moving, moving, moving': Evictions, displacement and logics of expulsion in London. *L'Année sociologique* 68: 67-100.
- Watt, P. and Minton, A. (2016) London's housing crisis and its activism. *City* 20(2): 204-221.
- Wolfe, P. (2016) *Traces of History: Elementary Structures of Race*. London: Verso.
- Young, M. and Willmott, P. (1957) *Family and Kinship in East London*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Zhang, Y. (2018) Domicide, social suffering and symbolic violence in contemporary Shanghai, China. *Urban Geography* 39: 190-213.
- Zhang, Z. and He, S. (2018) Gentrification induced displacement. In: Lees, L. and Phillips, M. (eds) *Handbook of Gentrification Studies*. Cheltenham: Edward Elgar, 134-152.
- Zirin, D. (2014) *Brazil's Dance with the Devil: The World Cup, The Olympics and the Fight for Democracy*. Chicago: Haymarket Books.
- Zuk, M., Bierbaum, A. H., Chapple, K., Gorska, K. and Loukaitou-Sideris, A. (2018) Gentrification, displacement, and the role of public investment. *Journal of Planning Literature* 33: 31-44.
- Zukin, S., Trujillo, V., Fraser, P., Jackson, D., Recuber, T. and Walker, A. (2009) New retail capital and neighborhood change: Boutiques and gentrification in New York City. *City & Community* 8: 47-64.